八二、由比ヶ濱の悲劇

谷崎潤一郎氏の令兄が妻子の死體を自ら燒く

妻子に別れながらも身を以て大阪にのがれた谷崎潤一郎氏の令兄で、日本橋蠣殼町に株式商をやつてゐる谷崎善三郎氏については、腸を千切られるやうな哀話がある。

相當に暮してゐた氏は、當時病弱の妻女に看護婦をつきそはせ、猶二人の休暇中にある息子を伴はせて鎌倉に轉地させてゐた、然るに彼の九月一日の大震災である、しかし湘南方面はよもやと思はれた氏は、日本橋の住居が全部燒け出され、何一つ出す事もなく、當時自家に殘つてゐた一人の息子の手を引いて辛うじて生命だけは無事を保つ事が出來たが、さアさうなつて來ると、鎌倉方面の事が氣にかゝる、何うかして妻子に遭ひたいの熱心さ、すると間もなく横濱鎌倉方面の災害は東京以上であり、全く絶望だといふ報告を耳にした、海岸に近い別莊である、倒潰しなければよいが、しかし海嘯にやられたかもしれないと、でももし助かつてゐたらと、萬に一つの淡い望みを抱きながら、早速單身鎌倉へその消息を訊ねに出かけたのであつた。

さて鎌倉に入つてみると、とても想像以上の慘狀に、眼が當られない有樣、でもそんな事は云つてゐられない、一刻も早く妻子の安否を知らねばと、その邊り一面に放り出されてゐる幾多の屍骸や、倒潰した家屋の間を通りぬけ、漸く自家の別莊に行つてみると、見る影も形もなく潰壞してゐる「あゝこれでは壓死して了つたに相違ない」と善三郎氏思はず涙ぐむでしまふ、處がそこを通りかゝつた一人の男、近所の人で幸ひにも妻子の安否をよく知つてゐた「えゝ本當にお氣の毒な事でした、此處は無事にお逃げになりましたが、確か海岸に逃げられたものですから、その後間もなくやつて來た海嘯の爲めに皆樣亡くなられたやうです」と、その男も眼に一杯涙をためてゐる「實は私の女房も家の下敷になつて死んで了ひました……けれども私には子供がゐませんから、旦那よりはまアよい方でせう」と自ら慰めるやうに笑ひ泣きしてゐる、覺悟はきめたものゝ、かくも無慘な死を妻子の上に見なければならないと云ふ事は何たる因果な事であらうと、その男に別れた氏は暫く呆然自失して立ちすくんでゐたが、不圖氣をとり直して「一刻も早く死體をさがさねば」とそれから、人夫を賴まふと鎌倉中をかけ歩いたが、賴まれてくれる人夫は一人もゐないのである、もうかうなつては仕方がない、これも因緣であらうと、氏自ら七里ヶ濱から、由比ヶ濱と長い海岸に幾つとなく打ち上げられてゐる溺死體の中をこれが妻ではないか、息子ではないかとたづねあぐむ事二日二晩、漸く妻子並に看護婦の

死體を發見したのは鎌倉についてから三日目の午後であつた。

無情といはうか、無慘といはうか、四つの屍を並べた時、氏は思はず聲を出して男泣きに泣いて了つたが、暫くしてから氣を取直した氏は、兎にかく茶毘に附して東京に歸らうと、立上つて人夫をさがしてみたが、やはり一人もないので、氏は觀念して自ら焚火を作り、妻を始めとして四つの死骸を燒いたのである、死體から放つ云ひ知れぬ臭氣も氏には何でもなかつた、かくして骨と化した四つの魂をかゝへて歸京したのは其翌日であつたが、今はあまりの悲愴な驚きに涙も出なくなつたと、喪神した人の樣に生き殘つた可愛い息子と、二人知人の家に敗殘者のやうな心持で其日々々を送られてゐると云ふ事である。

八三、死んだと思つた我子と

十八日ぶりでめぐり逢ふ

本所林町二の二三ブリキ職中代幸三郎(三九)は家族六人と一日夜本所被服廠跡に非難したが、自分だけがたすかり、十七日六人の死亡屆を持つて本所區役所に出頭したが、もう暫く樣子を見てからにしてはとのことに、自分は横須賀方面に行く途中、一人の男から新聞を借りて見ると、まよひ子の欄に長女中代はるの名があるのに狂喜し、十八日相生署に駈けつけると、はるは市外淀橋町柏木一七八保育院の有隣園に保護されてゐることがわかり、十九日午前十二時ごろ淀橋署に出頭して、うれし泣きに泣いて、東京日日新聞のために一人の子供がたすかつたと、よろこびながらはるを引取つた。

同じやうな話、深川西平井町三〇長澤さだ長男貞之助(一二)は、大震災と同時に行方不明となつたので、さだは毎日各所をさがしまはつてゐたが、十八日警視廳の迷子係に來てたづねると、貞之助は青山學院の迷子收容所に保護されてゐたことがわかり、警視廳でこれも十八日ぶりに、めでたい親子の對面。

八四、血潮の記錄

四萬の生靈を奪つた被服廠で

惡闘遂に職に殉じた山内署長のために

相生署員の手記

今回の大震災に際し、山内署長以下警察官十七名の死亡、二十五名の行方不明者や、重輕傷者を出し、最も悲慘なる犧牲を拂つた本所相生警察署では、昨日災害狀況報告書を發行して關係官省其他

へ配付した。

この報告書は當日の被服廠附近一帯の慘狀並に同署員の悲壯なる活躍を詳記したもので、凄慘の文宇に幾度か卷を覆はしめるものがある、それに依ると同日は府會議員選擧取締に關する打合せの爲め午前九時から同署三階樓上に原庭、太平、向島各組合署員の會合が開かれてゐた、正午かの大地震が起るや山内署長はバルコニーに出で立つて、管内の被害狀況を望むと共に直に有馬警部補に命じて、非番員を召集、之を各派出所に派遣し、巡査の配置を了した、此の時火の手は既に深川安宅町、淺草橋附近、淺草千束町、本所錦絲町、及び日本橋其他から揚つてゐたが、未だ管内は幸ひに無事を得たので山内署長は震災並に火災狀況視察の爲め、管内一巡の目的で署を出動した。

時に二時、四萬の生靈を奪つた呪はしき火は、深川方面の火焔を受けて、先づ管内花町附近に最初の黑煙を揚げた、續いて淺草橋方面の飛火を受けて石原町に發火を見、國技館附近に新しき火の手を望んだ時には林町附近はもう火の海と化してゐた、二時五十分管内の視察を終つて、急遽引返した山内署長はその時同署構内に家財と共に避難してゐた約一千人に向ひ、危險と見て兩國橋方面へ退却をすゝめ、同時に囚人十三名を釋放して、在署員に對し横網町被服廠側なる鐵筋コンクリート築造の巡査合宿所に避難を命じた、山内署長、原警部等約二十名もそれに次で同所へ難を避けたが、既に二萬

坪以上もある被服廠跡の廣場には四萬餘の人があり、家財は山の如く積んで、足の踏場もない大混雜を呈してゐた、かくて四時近くより風は益々强力を加へて來たので同所にあつて避難民を指揮してゐた、山内署長以下の警察官は止むを得ず、その取締を斷念して皆居所の地上に伏した刹那、廣場遙かの東西方に當つて一大音響と共に黑々と大火柱が立つた、それは旋風だつたのである。

この强烈な大旋風は忽ちにして宏壯な安田邸を丸呑みとして、火は被服廠の廣場に雨と降り注いで、各所に山と積まれた家財より一時に火を發し、四萬の人を嘗め盡さん勢ひで燃え廣がり、阿鼻叫喚、修羅の巷を此處に實現した、署員の全部はそれと共に悉く意識を失つたので、其後の山内署長の行動はこれを親知するを得ないが、死體となつて發見された地點から當時の狀況を推測すると、この一大旋風が起るや山内署長は、最も安全な地帶として署員並に其家族の多數を避難せしめた巡査合宿所の危險を思ひ、これを救護すべく旋風を突破して同所へ向つたが南へ强く吹きかけ來る旋風の爲めに足を取られ、安田邸方面に吹き飛ばされ、つひに燒死したものらしい、全く同所の旋風は猛烈を極めたもので、安田邸内の一避難者が庭を逃ぐる際、この猛焰を浴て、その儘木伊刀となつた一事實でも想像される。

風やゝ收まつたのは同夜七時三十分頃で、同時に意識を戻した原警部は、先つ立つて署員の在員を

大聲で呼ばつた、がそれに應じたものは齋藤電信技手唯一人で、合宿所前の溝板の下から關塚巡査、同所内廣場から有馬警部補、柳下巡査部長の重傷を負ふて倒れてゐたのを續いて救ひあげた、山内署見えずと原警部は、まだ燃え殘る屍體を踏分け、危險を冒して隈なく署員の在否を大呼して歩いた、すると突然左腕に幼兒を抱いた一婦人が、横臥の人込みの中から起上つて原警部に「ヤマグチ〳〵」と呼びかけるので、同警部も山口々々と反問すると、その婦人は意識をかへしたらしく「ヤマノウチ」と明瞭に答へた、顔は全く燒けくづれて、それと見る由もないが、その聲音は確に署長の夫人である事を知つた原警部は、喜んで助け上げ、そこから四丁程離れた唯一の燒殘家屋御藏橋巡査派出所へかつぎ入れたが、五度署長の安否を糺し、遂に三日午後五時落命して仕舞つた、然もその腕には死ぬまで既に屍體となつた令孃が抱かれてゐた、山内署長の屍體らしきものが、前記の場所に發見されたのは四日の午前十一時で、帶劍に依りほゞそれと推測するのみ、勿論その姿をたしかめる事は出來なかつた。

八五、不思議に助かつた二人の兄弟

大家の奥さん一飯に泣く

避難中に出産

二千人を助けた富豪

不思議に助かつた二人兄弟

三萬の市民が生きながらの焦熱地獄に陷つて、悲慘の最期を遂げた本所被服廠で不思議にも九死に一生を得た幸運の兄弟二人がある、兄は十七八、弟は十四五、二人は猛火を避けて中央の池へ飛込んだが、其處も人で一杯で身動きすら出來なかつたが、僅かに左の手が動くので、それで必死となつて頭から池の水を浴びて火を防いで居るうち、漸やく火が收まつた所から、二人は早く逃げやうと、ふと氣が付くと、燒けたゞれた數万の死體から出た油が池に流れ込んで居たのを知らずに頭から浴びて居た爲、二人とも目がつぶれて何も見えなかつたが、それにも屈せず手探りで安田邸の前へ出て木川の水で目を洗つた處、兄の方は少し見えるやうになつたが、弟の方は矢張り駄目なので、弟は兄に自分を棄てゝ逃げろといひ、兄は弟を勵まし手をとつて、やうやく市川の方へ避難したとの事。

大家の奥さんが一飯に泣く

下女の四人も使つて何不足なく暮して居た、日本橋箱崎町の齋藤某の奥さん、細帶一つで僅に身を以て小舟で逃れ、大崎のある緣家へたどりついて食を求めたので、精進あげで飯を與へると、涙を流して喜び、こんな贅澤なものを一人で食てはすまぬとて精進あげの半分を殘し、避難中の家族へ持ち歸つたとは氣の毒な話である。

避難中に出産した女二人

上野公園で一時避難して中野へ逃けて來た馬島某氏の話に、其人が上野に避難中附近に避難中の二人の姙婦が一時に虫がかぶつて、二人共玉のやうな男の子を產み落した、無論產婆もなく、水もなくやうやく附近の人々が助け合つて始末をしたが、二人共、夫の行方はわからず、苦しみながら泣いて居たと。

二千人を助けた江東の富豪

江東の富豪大川平三郎氏は、地震出火と同時に附近住民二千人を邸内に收容した、そして有志から成る團長、副團長以下世話役を組織して食糧係、衣服係、醫藥係とわかち、夫々活動させた爲めに、こゝに避難した罹災民は、衣食住に對して少しの不安がなかつた、富豪もこうすれば始めて近所の人に好かれる。

八六、棧橋の生別死別

船が岸を離れる一瞬間

見送の自動車が海の中へ

一日朝の横濱埠頭はけふ正午こゝを出帆するサイベリア丸の見送人で非常な賑ひを見せた、送る人送らるゝ人の間には、蜘蛛の巢の如く幾數條の紅白の細紙が投げ交され、陸と船とからは飛雪の如くハンカチが打振られた、さうした人混に交つて、これは東京から夫か父か兄弟かを見送りに來たらしく六臺の自動車を連らねた貴婦人の一隊があつた、その人達は船が錨をまき上げて岸壁を離れても其處をたとうとはせず、船の姿が段々遠退くや、自動車の上に立ちあがつて、手に手に白のパラソルを船をめがけて打ち振り〳〵踊り廻つてゐた、船からもそれに應酬するらしく矢張り甲板に向ひ、ハンカチが忙がしく動いてゐた、十一時五十八分サイベリヤ丸が横濱に別れを告げて、今正にその巨體を港外に乘り出さうとした刹那だつた、俄に地軸もくづ折れるやうな、ゴウーと云ふ物凄い一大音響が起つて、アハヤと云ふ間もあらず、車上に白のパラソルを狂氣の如く打振る婦人連を乘せたまゝの自

動車六臺もろとも、棧橋は叩き折れて海へ打ち込まれ、見る間にその姿は激浪に呑まれて仕舞つた。

「その時私はこれを税關の二階の窓から見てゐましたので、思はずアッと身を伸ばしましたが、氣がついた時には、さう云ふ私自身が既に建物の下敷になつてゐたのです、然し幸ひ身の周圍に隙があつたので、そこから屋根を破り表へ這出しましたが、もう其處には今の先刻まで自分が見つめてゐた總ては無く、夢にも見なかつた地球全滅の日の恐ろしい天地の姿が、まだ搖ぎつゝあるばかりでした、地震だな、さう氣がつくと、俄に父の事が心配になつたので、その勤め先へ駈出しますと、同じく私の身を案じて駈付けられた、父と税關横でバッタリ出會し、お互に身の安全を喜び合ふ暇もなく、沖の本船へ遁れて三日間、戰慄の中に滅び行く横濱を見てゐました。」

横濱税關に父子で勤められてゐる濱口常次郎君は、まだ去らぬ不安をあり〳〵と眼の中に見せながら、當時を追想されてゐたが、また急に言葉をかへて「御連合か御兄弟か知りませんが、船で立つた方も、きつとこの慘劇を甲板から望まれてゐた事と思ひます、歸り來る日を樂みに送つて來られた人を、却て歸らぬ旅に送らねばならなくなつた御當人のお心はどんなでしたらう、いや、それよりも現在肉身の死を目擊しながら、手の施し樣もなく去り行く氣持は、まアどう言葉に現せませう、東京の御遺族の方も、きつとあの人々をお探しだと思ひます、然しそれは底不底可能な事です、サイベリヤ丸、白パラソル、自分が眼のあたり見た此の動かぬ證據で、あの人々の死を御遺族の方に何とかお知らせしたいものです」と暗然と唇を嚙んだ。

八七、熱誠をこめた地方民の同情に

始めて蘇生の思ひをした都落ちの罹災者

きのふまでは奥樣お孃さまと呼ばれた人たちが、着のみ着のまゝのあはれな姿で都落ちをする、これらの人たちを田舍へ運ぶ貨物列車は、のろ〳〵とヤッと與瀬まで來て止まつた、こゝから鐵道は不通で徒歩聯絡になつてゐる、青年團員等が避難者たちに水などをやつてなぐさめてゐる。

輸送列車は最初は一日四五回だつたのが、昨今では十四五回になつてゐるが、依然各列車ともすしづめでヒドイのになると機關車の腹にいだきついたり、殊に屋根に乘つてゐたものは停車場の跨線橋や信號機電線に頭を打ちつけて死んだものすらある、現に浦和驛だけでも十二名、その他で約卅人位はあつたらうといふ、如何に混雜を極はめてるかが想像されよう、斯くして故郷へ歸つたものが九日までに約十五萬人を下らず、多くは東北信越關西方面の避難者である。

また一方徒歩の避難者は數日間殆どたべるものもたべない上に、睡眠不足で浦和町についたころは

疲勞の極に達しあるけなくなつたものが幾萬人だか知れぬといふ、埼玉縣及び浦和町北足立郡當局初め、地方の消防や、浦和商工、中學、師範生、青年團、軍人分會員その他の有志が總出でこれが救護に全力をそゝぎ、浦和町調の宮神社境内、公會堂、玉蔵院、浦和劇場、小學校等を救護所にあて、老人小兒婦人病者等を收容して食事を與へ、出發に際してことごとくにぎり飯を與へてゐたが、これも約十五六萬人に上つてゐる、從つて浦和驛でも一日十俵つゝを炊出して、避難者をめぐんだ。

また地方民中、親族知己の安否を氣づかひ、あらそうて東京に向かつたものが多く、これ等は避難民の都落ちとかち合ひ、浦和町附近の雜沓は目も當てられぬ始末だ、これらの上京者はことごとく浦和驛で下車させられたが、それでも徒歩で板橋に出て入京した者が矢張り十万人位はあつたといふ。

大宮驛の混雜も浦和におとらぬ猛烈さで、十日までの乘降客が數十萬人に達したといふ、十日の午後二時記者は死に物ぐるひで信越線の客となる、上尾、桶川の兩驛でな、青年團員がさつまいもを一本づゝつかませ、鴻巣驛では、娘子軍や少年軍が雨の中を冷水や、おさつの分與に忙しい、熊ケ谷驛深谷に至るところ、これらの慰問隊には涙のこぼれる思ひをしたが、しかし好意を受けたものは一小部分に過ぎず、中には泥土の中に取落した、おさつをひろひ食ふものさへあり、如何に食に飢えてゐるか、覺えず晴涙にむせんだ、呼び賣の辨當はあるが買ふに金はなく、空腹をかゝへたまゝ何こまでも〳〵運ばれて行くのだ。

高崎へくると上野方面から逃げた罹災者中下車するものがおほく、混雜は大宮驛と大差ない、殊に傷病者は東京附近の救護所では手當てが出來ず、こゝで手當てを求めるので、市當局は構内に救護所を設け、その他各團體がわれをわすれて至れり盡くせりの斡旋ぶりは感謝の外はない、傷病者の手當ては最初は毎日五六百人、十日までの延人員は三千餘名、一般の宿泊收容者は數萬人に達した、かく晝夜兼行不休の活動をつゞけてゐるので、いづれもへト〳〵の態である、また市内も宿屋といふ宿屋は罹災關係者で鮨詰めとなり、消防夫、青年團等は全部出動し、徹夜で警戒につとめてゐるので、罹災者は、はじめて蘇生の思ひがあるやうだ。(高崎にて東京日日新聞遠藤特派員)

八八、伊井蓉峯氏の奮闘と美談

船橋から青物を負ふて禮

二 食主義の實行

地震の時、伊井蓉峯が淺草の金田の女主人や、女中を觀音堂へ避難させ、仲店を吾妻橋へ出ると、假橋を渡るのが一人もない、逸早く橋へ出ると、後からボツ〳〵人がつゞいた、本所は最う猛火だ枕

橋からやつと拔けて土手へ出ると、日活撮影場から驅出して來た弟子の川島柳峰が「先生海嘯がくるさうです向ふへ行つてはいけません」といふ、伊井は「俺の家が大事だから行く、お前は勝手に自分の家へ急げ」と急いで行く途中、知人瀧川の子をみつけて伴ひ、僅十分で歸宅したが、屋敷は半潰れ、家人は門外へ蓆をしいて邸内に住む警官の妻子と避難してゐた、娘靜枝は父を氣づかつてゐたが、無事な顏を見て嬉し泣きに泣いた、伊井は羽織袴を半股引、脚袢、印袢纏に更め、一時家人を水神の渡船で避難させたが、始めの西風が後には大つむじとなり、東に變つたので屋敷へ戻ると、對岸の人々が船で遁れ、助けてくれの悲鳴が凄い、裏手の藤蔓の垣を破つて入つた人が約一千人、女子供に食事を與へ、水は毒だと湯をわかして飲ませる、高張提灯と篝火で急場を救ひ、船中で出産した二組の母子を四分板四五十枚で圍ふやら、薄べりを與へるやら、其内に喜多村の妻や、家人を始め知り合の十二三家族が避難してくる炊出しの米がなくなり、必死の苦面で米一俵を手に入れて炊出し、伊井は役場へ出かけ、證明書を貰つて玄米三俵を買ひ入れ、自動車は運轉手つきで陸軍救護班と、村役場へ貸した、四日目までに約一千人の避難者は大抵散じたが、六日位までは居殘つた人もあつたが、薄緣も四分板も一枚も殘らなかつた、其代り伊井の姿をみると大地に手をついて、禮をいふ人があるので、伊井始め人々は思はず泣いた、避難者であつた或人は船橋へ立退いたが御不自由だらうと遠路を青物を背負つて禮心だと態々やつて來た、人情は美しいなあと伊井一家は感動して又も涙を流した。

門下一同は無事だといふ中に、石川幸三郎だけは子供を抱いて被服廠で燒死したとの事に、伊井の妻は娘と共に涙にくれた、段々と平靜に復して多數の人も今は引あげて、女ばかり多い家族となつたので淋しさが身にしみ出し「先の人に最う少し殘つて欲しかつた」といふ氣分になつてゐる、伊井は門前につくつた屋臺の中に住み、半潰の邸の建直るのを待つてゐる、十日位で邸は原型にもどるといふ、此の際神信心のつよい伊井は、人に食べさせても自分は常の二食主義を、而もぐツと減して食べてゐるのは食糧保護を自分だけは斷然としてとつてゐるのである。

八九、異國の守唄に眠る孤兒や迷子

親を失つた鮮人の子にも親切な

ポーランドの伯爵夫妻

今度の震災には外國からいろ〳〵同情をうけてゐるが、その内でも眞心から献身的に自分の身體をも投げ出して救濟の事業につくしてゐる人に、ポーランドの伯爵ルビエンスキー夫妻がある、夫君の方は朝早くから代々木の罹災民がバラックを建てる手傳ひをなし、毎日勞働をしてゐるし、夫人の方

は淀橋の大森アンニー夫人の經營する有隣園が澤山の迷子や、孤兒を市の社會局から預かつて世話をする事になつたので、家は他人にまかせて、その方に宿り込み、何から何迄世話をやき、子供が親を思ひ出して淋しくなれば、日本語をあまり知らぬ夫人は、懐かしい音調のポーランドの子守歌や、民謡を歌つてきかせてゐる樣は涙のこぼれる程親切です。

「私は今この氣の毒な子供等の外に何の考へもありません、先年は私の國ポーランドの孤兒が日本で大變お世話になつた事を知つてゐます、皆で三十人程居ますが、一日三人位づゝ連れて行かれますが又三人位づゝ親兄弟や親類が判つて歸へつて行きます、大抵は三つ以上十二三歳位で、中流以下の手の少かつた家の子供が多いやうですが、中にはちやんとした家庭の子供らしいのも居ます、併しそう云ふ子はとりもたれて育つたせいか、さびしがつて泣いてばかり居ますが、他は皆割合平氣で、そこが子供だと思ひます、中に一人低腦な小さな娘が來てゐて、それが姙娠してゐます、或はこの騒ぎて親が捨てたのではないかと思はれます、それから朝鮮人の親のなくなつた子が兄弟で來てゐますが、何だか落附かず、打ちとけないので、私は一生懸命に心の薄らぐやうつとめてゐます。」と夫人は語つた。

九〇、ドーア一つが生死の境界

ブラジル領事の死

横濱在留の外人の中には、震災の犠牲になつて異國の土に化した者も隨分多いが、ブラジルの領事もその一人で、當日は平常のやうに日本人の書記を連れて、近所のレストランへ晝餐を取りに出かけた處であつた。

地震は恰度レストランの扉を潜ると一緒で、一足先に室内へ踏込んだ領事が、俄然崩壞した煉瓦の下敷となつてそのまゝ絶息、一足遲れて扉の外にあつた書記が、無慘な領事の横死を目擊しながら、何うする事も出來ず、生き殘つたといふ事だが、扉一つが生死の境界であつたわけである、が、幸ひに助かつた書記も餘りに恐ろしい出來事に遭遇して、一時は氣が變になり、毎日知人の間を驅廻つて取り止めない事を口走つてゐるさうである。

九一、皇后陛下傷病者御慰問

親しく傷病者に御言葉を賜ひ

御涙を注がせ給ふ

日光田母澤御用邸に御滯在の皇后陛下には、震災以來日夜赤子の狀態を御心痛あらせられ、難苦を

國民と共に分たんと厚き御心より一汁一菜の御食事を取らせらるゝ程であつたが、幾萬か數知れぬ傷病者をせめても親しく慰めばやとの有難い思召しで、突然還啓仰出され、二十九日午前七時四十五分且光驛御發車、大森太夫、千種典侍、西邑事務官其他供奉、十一時二十分上野驛御着車、プラツクのプラツトホームに降り立たせ給ひ、焦土と化した帝都に第一歩を印せらる、餘りの變りやうに陛下には御感慨深き御模樣で御出迎への秩父宮殿下に御對面種々御物語りの後、自動車で直に上野公園内に向はせられ、西郷銅像前に玉歩を止めさせられて、燒野ケ原と化した帝都に御涙をそゝがせられ、更に自治會館に充てられた市の罹災傷病者收容所に行啓御慰問あり、幼き傷病者を御いたはり遊ばされ、御眼は次第に曇らせらるゝを拜した、次で沿道の慘狀を御覽あらせられながら和泉橋の三井病院に行啓御同樣傷病者を御慰問あらせられ、午後三時宮城に還啓遊ばされた。

更に卅日には、午前五時御離床、八時卅分大森太夫、關屋次官以下供奉、自動車で坂下門から二重橋凱旋道路から日比谷にならせられ、避難者のバラツクを御視察あそばされ、櫻田門前から虎の門附近一帶の焦土、麻布飯倉、霞町に出でさせられ、下澁谷の日本赤十字病院に台臨、平山社長の御先導で病室隈なく御巡覽、罹災者に厚き御慰問の御言葉を賜はり、職員にも有難き御諚の傳達ありて、同十時十五分御出門青山六丁目の青山學院にならせられ、燒け出された築地の聖路加病院診療班と市内の震火災で兩親を失ふた孤兒、迷兒を東京市で收容してる所を御慰問あり、特に孤兒、迷兒の可憐な姿に御目を止められ、御涙をさへ浮かべさせられ、何に彼と厚き御心付けの御言葉さへ賜はり、同十一時過ぎ同所御出門同十一時四十分赤坂離宮にならせられ、攝政殿下と御對面、御一所に午餐を召させられ、午後一時卅分御出門、更に四谷慶大病院、三宅坂上陸軍衛戍第一病院を御見舞あそばし、傷病者一同を御慰問あり、同三時卅五分還啓あそばされた。

九二、攝政宮殿下被服廠跡の慘狀御覽

公務のため妻子を失つた
神砂大尉の哀話に涙ぐまる

攝政宮には本所深川の慘害地を御視察になり、公職に服務して妻子を見殺しにした、あはれな一將校に特に拜謁を賜はつた、午前六時赤坂離宮を自動車で御出門、上野公園で御乘馬、侍從長武官長等の供奉員を從へて、神田和泉町から厩橋を渡り、兩國停車場御野立場にならせられ、後藤内相、田中陸相、宇佐美知事、永田市長、鈴木近衛師團長からその受持について設明をきかれ、遙に被服廠跡を御遠望になつた、小泉憲兵司令官より憲兵隊副官の神砂大尉の妻子四人が危險な同廠に避難したこと

を知りつゝも公務のため、私事を顧みる暇なく、ために一家は全滅し、しかも震災後一日も欠勤したことのないといふ哀れな物語りを申上げた處、殿下もそゞろに涙ぐまれ、直に神砂大尉を御前に召され慰撫された、終つて再び馬首を永代橋、日本橋、銀座、新橋方面にすゝめられ、午前九時御歸還になつたが、今日の行程三里、十五日のものと合せて今回の震災地全部に亘つて御親察御慰問なされたわけである。

九三、深夜迄衣を縫はせ給ふ

罹災民のため良子女王殿下の御仁慈

廿三日廢殘の都にお還りになつた久邇宮良子女王殿下には、罹災民の困窮をひどく御心痛遊ばされ、親しく視察の御内意を洩らされてゐるが、未だ御婚儀前のことではあり、心ならずも日々お居間に引き籠られ、お妹宮たちと朝は早く、夜はおそく迄白魚のやうな、お手に縫ひ針をもたれ、御下賜になる着物を縫はれてゐる、そして雨につけ、風につけ、罹災民の事を思ひ出され、色々侍女におたづねになり、こま〳〵とその御感想を日記にお記しになつて居る、いづれ窮民を御慰問遊ばされるであらうが、今は罹災民救恤のお支度でなか〳〵忙しく、廿八日も母宮倶子妃殿下が震災打ち合はせの皇族方の打ち合せからお歸りになつて「傷病者の枕が問題になりました」と仰られると、お召し更への暇さへ惜まれて、あちこちから布をお取り寄せになるやら、籾を買ひ込むやらして、早速信子知子の兩女王後閑御用掛以下の侍女を候所に召させ、御自分達は裁縫に、後閑女史は山のやうな籾の前に坐り込んで、甲斐々々しく立働かれ、二三十の枕を夕刻から夜にかけて三時間足らずでお拵えになり、各皇族方と御一緒に傷病者に御下賜になつた。一方この際父大將宮殿下、牧野宮相、德川總裁など御相談の上、他日國母陛下として、彌が上にも御坤德を磨かせ給ふ御主旨から、專ら社會事業、慈善救恤の生きた學問を遊ばされるため、十月から御用掛一名を任命になる筈である、それには人格といひ識見といひ、官歴といひ申し分のない行政裁判所長官窪田聲太郎博士が今後社會問題に關する學理、實際に就て御補導申し上げることにならう。

九四、市から表彰される三人の殊勳者

己れを忘れて他を救つた方面委員の働らき

陸軍側では今回の震災について、おのれの身をわすれ、家をわすれて多數の人を救助した東京市方面委員の京橋月島稻垣末吉、小石川區太田宣次郎、淺草區島本龍太郎の三氏に對し表彰方を永田市長

に申請し、東京市では近く三委員の功にむくいるため、その表彰式を行ふといふが、稲垣氏は人も知る關東の俠客佃政の大親分であるが、氏は一日の大震災にあたつて、三號地の自宅のみが燒けないので、附近一帶の罹災民全部に自宅を開放し、直に食糧を給與し、今なほ寢食を忘れて配給につとめつゝある篤志家。小石川の太田宣次郎氏は、大震災當日家にあつたが、附近の博文館工場で職工八十餘名が屋根の下敷となつたのを認め、直に自分のオートバイを操縦し、赤羽工兵隊に急を訴へ、工兵四十名の出動をうながしたので、下敷となつたものゝ內、重傷十八名、死者卅六名を掘出し、館主大橋新太郎氏をして泣いて感謝させたと。淺草島本龍太郎氏は當日自宅は一面の火に包まれ全燒したのを顧みず、吾妻橋に立つて逃げ行く數萬の避難民が危險な吾妻橋を渡るをくひ止め、安全な上野公園に導き入れたといふ殊勳者である。

九五、半病人許りの警官達

裸一貫で燒け出された六千人

涙の滲む奉公振り

着のみ着のまゝ全くの裸で路頭に放り出されたのが都下六千の警官の近狀である、家族の事は元より自身の事さへ一切かまふことを許されなかつた警官諸君の頭には一樣に公務といふモットーが刻まれ、着るもの、食ふもの、住ふもの總ての生活品を奪ひ去られても、尙且つ勇敢に働かねばならなかつた、漸つと秩序が恢復しかゝつた今日、結果は過勞、寢冷え、榮養不良、下痢患者の續出となり、水上、月島、洲崎三署では窒扶斯と疑似赤痢で三名の巡査が斃され、此上の恐慌をさへ來して居る、不眠不休の怖るべき勞務に對する報酬としては、餘りに悲慘な事柄である、扇橋署員は此間の暴風雨に腰まで浸水、水攻めの中で氣の毒な罹災者の爲めに泳ぎ廻つてゐた、被服廠裏の酒井伯邸燒跡に二三坪の焦トタンバラックを建てた、原庭署と外廓だけを殘したがらん洞の相生署とに起きるも寢るもよごれきつた夏シャツ一枚を着物にして、綿のやうに疲れた身體を雜魚寢する警官達は全く人事とも思へぬ慘狀である、警視廳當局も此點には非常な心配で目下應急施設を急いで居るが、其の困苦の中に所謂公務の爲に特に活動した人に對して、此際十分に表彰慰勞することになり、本署直接の調査と罹災者や其他の人達から續々集まつて來る感謝の手紙等を基にして人選中であるが、右警視總監の名によつて出される特別賞與を受ける警官は六、七名に過ぎず、一般表彰の警察賞與は餘程の數に上るらしいとのことである、それと同時にこの災難に脅かされて公務一切をなげうち、何處かへ逃げかくれてゐた警官に對する處置もとることになつてゐるが、それは極僅少である、警務部の今井警部は語

つた。

六千人からの遭難者は當時正服を着てゐたとは云ひ條、火と水と罹災民救助收容に連日活躍した結果は殆ど全部役に立たぬものとして了つた、水上、月島、洲崎、原庭、相生、扇橋方面の巡査達は全くシヤツ一枚になつて居るものが多く、急遽大阪へ制服を依頼したが、僅々千着が廻されたばかり、それも荷揚げ不能で、まだ芝浦の沖にあるといふ始末、全部の巡査達は其儘で一切不休で働いて居るが、偶々一睡をしようと思つても、たつた一枚の毛布が下敷き上がけの蒲團にされて居る、位であるから、此の頃の夜の寒さには風邪も引く、寢冷えもする、それに公務に從ふものといふことの爲に各所からの支給品は總て罹災民を先きにする、結果は容易に彼等の物は與へられない、その中で避難民一切の保安に任じ、互に斃れるまで活動を續けようと申合せて、彼等の現狀は慘鼻の極とも謂ふべく、當局も同情に堪へないでゐる、もし此儘で放置されたならば、みんなが病氣になつて了ふやうな虞れもあるので、せめて非番巡査の休眠所だけでも署内に設けようと、目下類りに急いで居る次第である。

九六、涙無しに聞けぬ迷子や孤兒の話

父に會つて縋る子、背に負うた母の位牌

青山女學院では古田傳道監督が、キリスト教關係の婦人十五六人を指揮し、神學校女生徒の應援を得て、十五日から市内各警察署で頂かつて居た災害の爲の迷子百四十二人を連れて來て、世話をして居るが、親が判明して引取られた、仕合せな子供は六十人で後の七十六人は、未だ親や兄弟に別れて孤獨を悲しんで居る、收容所は女學院裏の雨天體操場で、そこには四五十枚の疊が敷かれ、棚の樣な所には子供の汚らしい着物や陸海軍から寄贈された寢具の毛布が山と積まれてある、古いオルガンが一臺、讃美歌の書も二三冊ブラ下つて居る、寄宿に通ずる廊下には炊事道具や、味噌醤油など雜然とお風呂も立つてゐる、六七歳の子供はもう仲よく五六人宛遊んで居るが、三四歳のは泣いてムヅかるので手傳ひの若い婦人等が抱いて頻りとなだめて居る、寢こるんで居る子供も遊んで居る子供も、皆身なりがきたなく、頭や顏、手足にはおできや、ふき出物がでて一見細民の子供であることが分る。

毎日朝晩二回は讃美歌を歌つて、お祈りをさせるさうで、風呂から病氣の療治までよく行屆き、流石はキリスト教信者の婦人だけあると感心させられる、子を尋ねる人々が入替はり、立替はり來る、そのうちに淺草玉姫町から來て居たキクエ(五才)さんのお父さんが迎へに來た、キクエさんは震災の日幼稚園に行つて居たので、おとうさんは死んでは居ないと信じて居た、それで前日淺草の觀音樣へお

詣りをして、御みくじを引くと馬鹿によいのですと小躍りして喜ぶ、キクエさんに監督の古田さんが、おとうさんかと聞けば、だまつてそばに行つてすがつて見せる、繃指揮の松岡さんが幾ら嘘を云つても子供は正直なもので偽られません、と說明する、手傳ひの婦人達はキクエさんのおとうさんがわかつたと聞いて、皆出て來て喜ぶ。

そしてキクエさんに人形とお土產の袋をやりいゝねキクエさんと交る〳〵あやす父親はお禮を云つて出て行く、門の所で近所のおかみさんや、婆さんが話を聞いて、我事の樣に皆涙を流して喜んで居た古田さんは「始めは泣いて泣いてほんとに弱りましたが、只今では慣れて餘程よくなりました、色々の涙話もあります、小布施フサと云ふ温順しい利口さうな十二の女の子が、八つと、六つと二人の姉妹を連れて下谷の入谷町から迷子になつて來て居ましたが、つい先日埼玉の叔父が迎ひに來て歸る時、フサ子さんはしまつてあつた大きな一つの包みを自分が脊負ひ、小さい包を妹に脊負はせたので叔父さんは「いらない物ならお禮に皆さんにやつたらいゝだらう」と解いて見ると父の浴衣二枚と、今年の三月死んだ母の位牌と、佛壇の戸四枚と、戸籍謄本と、一家の寫眞や、自分達の袴や、學校道具、色紙や人形などの玩具がちやんと包んであつたいちらしさに皆泣かされましたと話してゐた。

九七、猛火の中で動物を愛護した園丁

火の中で大象を保護

命を賭し小象を救ふ

一切焦土と化した淺草に觀音樣と共に燒け殘つたものゝ中に、曩に掲載した虎などのゐた花屋敷の禽獸がある、卽ち丹頂、ベリカン、熊五匹、鹿二匹等で、此の外に園丁福井酉造君(三九)が生命がけで助けた十一歲になる小象が一頭息災に長い鼻をふつてゐる、何しろ圖體が大きいので大變でした、外の猛獸は皆拳銃で射殺しておいてから、象にかゝたのですが、恰度大きな方の象の檻を鐵筋コンクリートにする工事の最中だつたので、屋根へ葭簀を冠せてありました」と當の福井君は埃だらけの顏を拭きながら語り續ける。

「火が千束町の方から延びて來て花屋敷一圓が焰を上げてゐる最中です、私は水道にホースをつけてその水を檻の中に引き、何とかして助けてやらうと一生懸命に水をぶつかけてやりました、おとなしい奴だけに殺すのが可哀さうで、もうとても駄目だと言ふまで水で身體を濡らしてゐましたが、する內に屋根のその葭簀が燃えてポンポン落て來る樣になつたので、もう見限るより外は仕方がなくなつ

たのです、それでまア御覽の通り、今はモウ黑焦けになつてこんな可哀想な姿になつて了つた譯なのです、そこで私は急いで大工の細工場に入れておいた十一歳の小象の方へかけて來たのですが、その時はもう何方を見ても火ばかりといふ有樣で、とても水などをやつてゐる閑はありませんから、鎖をほどいて表へ出してやらうとしました、處が象の先生物凄い火を見てから、もう悉り怯氣ついて了ひ仲々動きません、仕方なく引摺る樣にして追ひ立てながら、火の中を出ましたが、正門を出ると直ぐ樣觀音の五重塔につないで、そのまゝ五日間雨晒しにしておいたのです、死んだ大きな象はもう六十一歳の老年で、兩方とも印度產でした、それから熊や鹿は不思議に助かりました、火事と一緒に直ぐ穴倉の中に追ひ込んで、おいたのが巧く行つて恰度燃える樣な草もなし、やつと助かつた譯です。」

九八、重油槽が燃えて一面の海火事

凄慘を極めた横須賀市

山田海軍法務官語る

足痛の爲め横須賀海軍病院へ入院の豫定で、震災當日の九月一日午前十時品川發同十一時横須賀に着した海軍省山田法務官は當日の狀況に就て語る「自分はアノ際恰度車に乘つて居たが、町の兩方面から家屋が倒れかゝつたので、直に車を捨て鎭守府へ行くべく引返すと既に海岸通りは交通遮斷となり、止むなく屋根を通り、汐入から廻つて鎭守府へ行つて見ると、もう水交社は燒け、火は既に全市に亘つて居た、同方面は井戸が不自由の爲め、山の手を除く全市は五六時間の中に忽ち烏有に歸して、海軍の手で助けられる丈は助けたが、彼此する中に猛火は機關學校、兵學校に移る、一方に重油タンクが燃え出したので、邊りは一面海火事と變化した。

最もひどいのは停車場から市に通ずる道上の崖崩れで、需品倉庫抔は半ば食み出し恰度、汽車が着いて間もない時であつたので、通行者は全部生埋となり、人數も隨分多かつたが、之は容易に掘出せない、震害の甚だしさは東京以上で、全部悉く完全な家屋は一軒もないと云ふても過言でない、市民の死傷は多數の中に最もいたましいのは活動寫眞に入つて居た者の全部で、之は海軍側で非常に努力して、一部分助かつた者もあるが、大部は駄目となつた、海軍の死傷者は約二三百名で、工廠は別條ないが、建物は半壞した、夫から其の夜の九時に軍艦で横濱へ着いて邊を見廻すと横須賀、東京方面一帶の火事で、其の凄絶悲慘何とも云ひやうがない位である。

芝浦に着いたのが二日の午前二時頃で、火事の眞ッ最中であり、萬難を排して同四時頃品川の自宅に辿れたが、横須賀では其の晩から海軍需品庫の方で糧食等に就て心配して居るから、其の邊の事は

大抵大丈夫かと思ふ」と。

尙同方面被害現狀視察の爲め六日驅逐艦薄にて、芝浦發同午後六時横須賀着、七日午後一時同地を出發した、同省佐藤法務官はその後の現狀に就て大要左の如く、八月海軍法務局長へ報告する處があつた「當局者は震災翌二日横須賀市内の米屋を始め、糧食關係の商店より穀物を集めたが、その數は四千俵（一斗入約百二十石）あり、之を市内全避難民に配布したので、當面一週間の食料丈は保全されたが、尙横須賀鎭守府長官より奥佐世保等へ穀物輸送の救援盡力を求めたので、今日では續々到着し困らない事になつて居る、單に横須賀許りでなく三崎、浦賀等三浦半島一帶からもドシ〳〵救濟を仰いで來るので、此方面にも相當手を盡して居る、慘死者は停車場附近其他が二百名乃至二百五十名で別に市役所で檢視した者が、今の處四百名である、鎭守府及同方面の山々は全部崩壞し、同地へ行つて見ると、まるで横須賀へ來たやうな氣持は起らぬ、殘存家屋は極めて僅少で山の方角へ孤立して居た家とか、寺院の一部と云つた風のもので、避難民の多數は大抵海軍とか、是等の方面で收容されて居る、地震が恰度晝飯時分であつたので、慘害の割合に死者の尠いのはせめてもの心慰めと思ふ」と。

九九、子供が旋風に捲き上げられて

不思議に助かつた人
看護婦の殊勳
被服廠で助つた人の不思議な實話

本所被服廠に避難して生き殘つた中に、市會議員早川庄太郎氏の親戚で、市街自動車の會計主任鈴木利久太郎氏の細君がある、その直話――本所綠町の自宅を出る時は、自分は姙娠四ケ月であり、また乳呑兒と、六歳の子を連れて被服廠に急ぎました、空地一面の人波の中に、その夕方に一大旋風が起り、火焰が渦となつて荷物と人との差別なく燒けついたが、その時にアレヨと思ふ間もなく六歳の子供がまき上げられ、途方にくれて人に押し寄せられてゐると、目の前に天から降つて來ました、漸く窪地へたどりついて二人の子を覆ひ、かくして居ると左右からよりかゝる人が居て、有難いと思ひましたが、氣がついてよく見ると、それはもう死んでゐる方でした、朝になつて生き殘つた人は二三百人もあつたらうと思ひますが、外に出ると千葉縣の幕張のお百姓に助けられ、十三日までお世話になつてゐました――夫の鈴木氏は綠町に驅け付けた時は手の出しやうもなく、大川へ飛び込んだが、それからは夢中で、氣が付いた時は船橋にゐたので、再び大火の都に立ち戻り、旬日の後に圖らず親

子の歌會に涙にむせんで居る。

看護婦の殊勲

猛火中の大奮闘

駿河臺からお茶の水にかけては順天堂、杏雲堂、瀬川病院、佐々木病院、金杉病院など幾十つかの病院があつたので一日の夜、四方に火の手のあがつた時は何千人といふ瀕死の病人が道路に運び出されて酸鼻を極めてゐた、而も各病院の醫師を始め、身體の達者な男達は患者を置去りにして、總て逃げてしまひ、看護婦だけが負つたり擔架に乘せたりして「もう少しです氣をしつかり持つて下さい」と口々にはげまして、遠く文部省前の方迄運びだした、其爲に何千かの看護婦は自分の着物一枚も運び出す暇もなく、死傷も一番多かつたと。

母子三人泣く

佐倉驛前の悲劇

千葉縣佐倉驛前根郷救護所から十一日朝、多數の罹災民が出發したが、母子三人の一組がたゞ寂しく取殘され、重き病に呻吟してゐる、これは日本橋區旅籠町廿四館林鐵五郎方同居大野一郎内縁の妻で樋口てい(三〇)長男義彦(六ヵ)次男平八(四ヵ)だが一郎は大震災の折、行方不明となり、母子は東葛飾郡關宿町江口町高島榮次郎を尋ねて避難したのだが、ていの病は重りて、枕頭の二兒の心配してゐる樣は悲哀の極である。

一〇〇、被服廠で一家族皆無事

上半身黑焦げの兵士

御眞影を抱いて

不思議に助る

被服廠で不思議に助かつた本所南二葉町一川口又藏妻まつ(四一)は地震と共に、みつ子、義雄、勝一、修三といふ幼子をひいて被服廠へ逃げ込んだ、幸ひ水道の破裂する箇所で頭から泥をかぶつて猛火を防いで夜を明した、附近に冷藏庫があつたので燒け殘りの氷で辛く命を助かり、その内に軍隊に救はれた、不思議に夫又藏とも出會つて、二日の午後三時に口比谷に逃げた、荷物一つ持つて出なかつたので助かりました、とは本人の話。

上半身黑焦げ

歩兵三聯隊の軍服を着た兵士が一人、いきなり吉原公園と病院との間の道路にある水道の給水管中にもぐり込んだ、やつと全身は埋つたが猛火は鐵の蓋を眞赤に燒いた、苦悶の兵士は下から鐵蓋を押しのけ立ち上つた、すぐ胴から上が眞黑に焦げて死んだが、胴から下には生々しい肉と軍服がそのまゝ殘つてゐた。

巡査が命の親

芳町のある藝者が、子供一人を抱へ二人をつれ座敷着をうんと持出して、新大橋の上に避難しやうとして橋の入口まで來た、頑張つてゐる巡査が荷をもつてゐる者は通さぬといふので、無念ながらきれいな物を皆溝にすてゝ橋の中央にのがれた「今から考へると荷物を捨てさして呉れたあの巡査がありがたい」と語つてゐる。

如來の御利益

淺草壽町に住んでゐた本莊といふ家族五人は地震と共に、淺草本願寺へ逃げたが、夜に入つてそこも危く、親子五人手をひき合つて、猛火の中を駒込へ落ちのびた、かねて肌身をはなさず信心してゐた如來の像も打ち忘れてゐたが、後で如來の足部だけが帶の間からころげ落ちたので、全く信心のおかげだと、今更泣いて信仰を續けてゐると。

永代橋の悲劇

三千人の人達が命の綱と頼みにした永代橋もいよ〳〵猛火攻めとなつた、橋が燒け落ちると同時に皆河中に飛び込んだ、三町程へだつた土船にたどりついて助かつたものは、たつた三十名ほどしかなかつた。

御眞影を抱いて

相生小學校長山本長治氏は劍道五段の達人であつたが、例の被服廠で燒死した、屍の兩腕には御眞影をしつかり抱き、側には男女訓導三名と、教へ子が四人倒れてゐた、御眞影と部下と教へ子とにひかされて尊き犧牲となつたのである。

一〇一、一家八人の慘死

三難を遁れた鈴木市議

沈着な交換手

三難を遁れた鈴木市議の夫人

本所の市會議員鈴木一郎氏の夫人は、今月が丁度臨月といふので向島に出養生して居た地震！　火事！　と聞いて八百松の上手から隅田川に飛び込んだが、水心もないのに自然と浮び上り、流れ行く荷物にしがみつくと、通り掛りの傳馬船に助けられ、一安心と思ふ間もなく、その舟が燃え上つたので、またもや川中に飛び込んだ――夫君はテツキリ駄目とあきらめて取敢ず夫人の里方に行方不明の報告に赴くと、當の奥様は何の障りもなく、甲斐々々しく立働いて居た。

一家八人慘死白髯附近の川中で

東京府下小臺の酒井次郎吉一家八人は最近千葉から移轉したばかりであるが、一日所用があつて本所業平町の親戚へ行つて居つた際、火災となり逃惑つた未、行方不明となつたが、捜索の結果九日白髯附近の隅田川で八人帯でつなぎ合つて溺死してゐたのを發見した。

沈着な交換嬢千葉局内の美談

千葉郵便局は地震と共に全半潰あひつぎ、壁は落ち、瓦は碎け、電燈は消えたが電話の交換嬢ばかりは皆階上にとゞまり、餘震の中に沈着を持し、不眠不休で交換事務をつづけて居た、このけなげさは千葉市警戒の連絡がとれ、災害を少くしたばかりでなく、色を失つた市民達をどれ程鼓舞したかしれなかつた。

一〇二、燒跡に食を探す奥さん孃さん

火の粉を浴びて池中に一晝夜

死體の中から這ひ出す人

文なしの呉服屋

夜中に目をさまして妻子の顔を見る度に泣かされます、私は日本橋に三階建の呉服店を開いて居ましたが、いまはほんの着のみ着のまゝで行く處もありません、役者や色街に一万圓位の貸があるのですが、これもとれる見込がありませんし……とは日比谷公園の罹災者の話。

火の粉を浴び池中に一晝夜

私は吉原の池の棧橋の杭につかまつて、火の粉が飛んで來る度に池の中へもぐつて助かりましたが

妻子はみな溺死してしまいました、池の中で人の肩につかまつて居るうち焼かれてしまつたんです、私はもう働く氣がしませんとは上野公園のある罹災者の話。

焼跡に食を探す奥さん孃さん

横濱の罹災者は二日といふもの、飲むに水なく、食ふに食なく、疲勞と困憊共の極に達しながらも何かで露命を繋がうと、焦土と化した焼野原をウロつき廻り、倉庫跡から黒焦となつた罐詰などを探しては餓鬼のやうに叩きこはして食て居た、それが相當身分ある奥さんや、令孃までが恥も外聞もなくやつて居た。

死骸の中から這出す人

私たちは錦糸堀の泥池の中へ驅け込んで、火の子の雨が降る度に顔を泥の中につつこんでゐたが、側の人が段々死んでゆきますので、私も氣が遠くなつた處を會社の人に助けられました、近所では皆一人か二人位かけてゐるので、一家無事でかへつて氣の毒な感じがしますとは本所のある罹災者の話。

一〇三、川の中に七時間

辛ふじて助かつた親子三人

憂ひを抱いて震災地からの報道を一縷の綱と頼つて居る人々のため、途中一子を失ひながらも夫婦と八つになる子供を連れ、彼害の最も激甚であつた、本所北新町三十五番地から避難して來た泰和探偵社長森賢氏は遭難の模様、避難の方面等につき語る「第一回の地震のあつたのは一日の午前十一時四十分頃で、當時私は新聞記者の人と階上に對談中であつたが、最初は大變な事も無からうと思つたが避難のため荷纒めを始めると、隣の家と前の家がガラ〳〵といふ大音響と共に倒れ、而も前の家では三人潰れた下になつて居たので、之を取出してやつて居る處へ、厩橋附近の人が厩橋の附近は安全だからと云ふので卅名許り着のみ着のまゝ地震の搖れつゝある中を厩橋方面に逃げたのであるが、家を出る時は既に同じ本所でも吉岡町、石原町及び江東方面の三ケ所に火災を起して居り、一時間許り立つと淺草の藏前あたりから雷門邊にかけて火災が起り、南は龜澤町交叉點からも燃え出し、北はビール會社の方面に火災が起り、四方火の海と化したので、私達は一時停電して居た電車の中に避難したが猛火はだん〳〵近より來るので、ライオン工場の前に再び逃出すと烈風のため川向から熱風吹きつけたので、三十名許りの者は散り〳〵になり、私共親子は隅田川の中に飛び込んだが、引汐のため胸の上までしか無かつたので、二時から九時頃までかたまつて居ると、荷物と共に厩橋の上に避難し

て來るものが多く、火は橋の上の荷物に飛火したので、橋の上の者は何れにも向けず、箪笥其他荷物を川の中へ投げ込み、之れに取り縋つて流れた、泳ぎの出來るものは泳ぎ廻つたが、出來ぬ者は沈んでしまい、眞桑瓜か、西瓜でも流れるやうに屍體は流れ、私達の傍も幾つ流れたのか知れぬ、夜も荷物の積んであつたものが五つ六つ、燒け橋も其中燃燒物の部分は燒け落ちたので、どの位死んだか知れぬ、私達は途中小供一人失ひ、親子三人となり、埼玉縣草加の手前に恐ろしい一夜を明かし、二日上野から千住方面を廻つて來たが、生地獄とは之を云ふのであらうと思ひます、其の上種々なる流言蜚語があつて人心は戰々恟々としていました。

一〇四、盥を冠つて水中に七時間

關口一也翁の命拾ひ

豐川光長氏と肩を並べた彫金家關口一也翁は、向ふ島の新小梅に住んでゐた、大地震と共に堤の上に避難したが、枕橋の方面からと言問の方面から兩方の火に挾まれ、逃路を失つて隅田川へ飛込んだ、其處へ盥が一つ流れてゐたので、それを冠つて火の粉を防ぎながら丁度七時間川中に浸つてゐた、無論子息の關口眞也氏や家族一同ともに離れ〳〵である、火が漸く遠のいてから、堤へ上つて見ると一家族にばつたり出逢つた、互に喜びながら百花園へ逃げて野宿をしたが、折角出した家財も、藏品も丸燒であつた、一也翁徐ろに吟じて曰く「初秋や命を拾ふ握り飯」又曰く、「時により寶も灰になる浮世、明日をも知れぬ空と人の身」一也翁は當年七十五歳で安政の大地震の時は六歳になつてゐたが、安政の時の記憶は殆どない、只地震が濟んでから、地震の龜裂の中に入つて遊んでいた事だけを覺えてゐるといふ。

一〇五、人情美の發露

腕一本で數萬の財産を作りあげた老婆の美擧

本所五百羅漢寺の前住職若林芝玉師の一粒種の後胤と生れ乍ら、性來の奇癖から下谷山伏町の細民窟に納まり、發明事業に身を捧げてゐた若林茂君と云ふ變人がある、有益な發明を世に出すこと百幾十種に及び、發明萬能家であつたらしい、それが今度の震災に遭ふて「人間の發明なんて天の威力の前には屁一つにも價しない、たゞ天の暴力にも負けないものは人情の眞心から出た情だ」とつく〳〵思ひ込んで云ふところを聞くと、當日若林君は鎌倉の知人の許に赴き、勸められるまゝに由井ケ濱で

海水浴をやつた、ところが波が漸次荒くなつて海面が見る〳〵黒凄い色に變つて來た、それでも平氣で泳いでるのは外國人四五名丈、薄氣味が悪くなつたので陸へ上り着物を抱へたまゝ砂地を歩いてくると、突然足をすくはれて大地へ投げ出され、恰も豆を熬る様に轉がされた、その刹那に地上が稲妻形にめり〳〵と大割れに割れたので、始めて大地震と意識した、此の時陸一面に亘つて屋並の潰れ家から「助けて呉れ」の悲鳴が一時に上つた物凄さ、それからくた〳〵に飴ン棒の様に曲げられた鐵道線路や、鶴ヶ岡八幡宮始め鎌倉五百年の歴史的建物が、一瞬間に滅茶々々に破壊された様や、切通しの山上から、江の島一帶を襲ふ海嘯を見下した悲壯な有様に悉く膽を潰し、更に大東京の焦土と化したのを見て、遂に世の中の無情を感じ、眞赤に成つた單衣を着て、生大根を嚙り乍ら、トボ〳〵と赤羽へ往かうと途中の岩淵村迄來ると、往來に甲斐々々しく身拵へをした六十近い大きなお婆さんが潮の様に流れくる避難民を慰撫して、俄造りの提灯や、握り飯を與へるやら、此のお婆様に救はれた者はどの位だか判らない、名利の爲めでも、虚榮でも無い眞固の眞心からの親切だ、自分も救はれた一人だが、此の時ばかり地獄で佛の言葉通りの人情の溫か味に觸れることができ、天の暴力にも打ち勝つものは人間の情だと熟々感じた、他の人達と共にお寺に收容されて數日間溫かいお婆さんの情に浴しお蔭で再生することができた、此のお婆さんも實は燒出されの一人で、上野廣小路の伊藤松坂屋の隣の大和屋と云ふ有名な漬物屋を一代に盛上げた女傑であることを知つて、私は都新聞に依つて世間に隱れた此の大慈善家の有つたことを、救はれた幾百人を代表して知らせてやり度い、と語り終つて熱涙を流してゐた。

一〇六、燒跡で割腹

震災後の悲劇

横濱市福富町三丁目空樽商十針徹二(三四)は九月一日大震の際、一家殘らず壓死されながら、たゞ一人家よりのがれ出で、翌二日燒跡にチラリと姿を見せたきり行方不明となつた處、二十七日に至り燒跡で腹十文字に切り自殺を遂げて居た事が發見された、同人が自殺原因として傳へらるゝ所は、當日實父民藏(五六)が屋根の下となり、左手を棟木の爲め壓せられ、免れ出づる事が出來ない上に、火は隣家まで來て居るので、救助に來た長男徹二は、鋸で左手を挽いたが鋸がすぐナマッたので、今度は薪挽き用の荒鋸で挽ひたが、腕を切り終へない中に火が廻り、徹二自身も危くなり、叫び聲を擧げる實父を其儘に免れ去り、又は生きながら燒死させたので子として苦痛に堪へない爲めであらうと。

一〇七、主人に背き命を拾ふ

不思議に助つた墓口屋の小僧

家が燒け落てから親戚の人が尋ねあぐんで「墓口屋大島一家不明」と立札したのは、本所外手町であつた、隣の人が十七日又そこへ行くと、前の立札は無し、巣鴨一一四曾我内大島利邦妻さく、長女啓子と記し、其脇には長男利邦、高橋ヤス(妾の妹)加藤正雄(小僧)右三名不明と新しい立札を建てあつた、此の人々は矢張魔場被服廠跡を唯一の避難場として逃れた人々である、立札の前に居た親戚の人々が喜んで其の避難先を探さうとして居ると、通りかゝつた千葉縣八幡の八百屋が此家の主人と中山の法華經寺であつたといふ、それで漸く此處を逃れて巣鴨に落ついたことが判つて、そてで早速巣鴨へ手紙を出したら、其返事で小僧は一家と離れて品川に避難し、無事といふ事が二三日してから判つた、小僧が免れたのは、主人夫婦の言ふことをきかず、無理に被服廠から脱れ出た爲めであるが、あとの二人は未だ判らない。

一〇八、死ぬなら一層自分の家で

帝劇平山氏の遭難

帝劇の平山晋吉君は二宮行雄君が上海へ支那俳優の綠牡丹一座を仕込に行き、留守中の舞臺監督と作者主任の代理を賴まれ、九月一日は本所元町(回向院畔)の家を十一時十分に出で、電車で東京驛を過ぎ府廳の方へ曲らうとすると搖れ出したので、電車を飛下りて轉がり〳〵電車の線路を駈出し、帝劇へ着くと、山本專務が「平山君來のか」といふ間もなく數寄屋橋の方に火の手が揚がり、警視廳の官宅が燃え出し、警視廳は忽ち火の渦に卷かれた、すると逸早く劇場の前に火が移つて家根は一面の火煙が立つと見る間に、四階三階二階のきらひなく窓から火焔が吹出した其の物凄さ、時に消防夫が必死の働きで帝劇の新館をめざましくも救つた。

五時四十分劇場が消失するまで見屆け、山本專務に暇を告けて家路をさして魚河岸に掛かると大混雜、やつと江戸橋へ出ると押潰されさうな苦しみをして命からく〳〵堀江町の園屋河岸へ出て、杉の森の稲荷新道を通つたのは人通りのない道を選んだのである、それから富澤町で本所錦絲堀の主任刀根氏の家の者に逢つて自家の樣子を聞くと、四時頃に燒け落ちたと聞いて驚くと直ぐ家族のものが心配になり、いろ〳〵道を綾取つて、濱町河岸から兩國橋に出たが、一先づ上野へ避難しやうと思ひ立

ち、淺草橋まで行くと進退谷まり、もう一命は無いものと思ひ、少しばかりの猶豫を目附けて引返し、吉川町の藝妓新道から又兩國橋の袂へ出たが、本所へも這入れず、再び帝劇へ戻らうとすると人形町が火だ、大廻りをして箱崎の土州橋へ出やうとしたら其の箱崎も火、まゝよと新大橋の橋臺へ來て左右を眺めると、そこは地獄の活る畫卷物そつくりだ、又も人に揉まれ揉まれて兩國へ行く事になり、矢の倉の福井樓の前までくると、自分の懐にしてゐた袱紗と同じ切が落てゐた、拾つて見る自分のものたが紙入はない、一文なしの心細さで兩國公園内に止つてゐる電車に這入ると、柳光亭も龜清も盛んに燃えてゐる、そのうちに火は柳橋を越して電車通りへきた、火に包まれて「死ぬなら一層我土地へ行つて死ね」と覺悟を極め兩國橋の半へ進むと、不思議にも妻子と孫とが避難してゐたので、互に顔を見合せて只茫然とするばかり、暫くは言葉も出なかつた。

西兩國の火はます〳〵烈しく、熱さに堪へられず橋詰の石置場へ行くと、土地の人ばかり二百人程ゐた、淺草方面から大きな火の粉がふりこむ表忠碑の隣の家が燃え出す、苦痛に苦痛をかさねた一夜をあかし、燒けた製氷會社の跡から氷を拾つてきて正氣づいた、二時頃龜戸から稲毛まで汽車がある と聞き、八人の家族は火の中を出掛けたが五つに九つに十一といふ孫を背負つたり、抱へたりして龜澤町まで行くと死骸は累々としてゐる。

雨に溶けさうな黒焦の嬰兒や、抱合つたまゝの悲慘さ目もあてられず、江東橋は燒け落たが工兵の力で一人づゝ通るといふ始末、後を振返つて慄としながら龜戸驛へつくと、汽車は滿員で乘れず、市川へ歸るといふ工兵に孫を賴んで乘せて貰ひ、自分等俺子三人は窓から汽車に乘つて大谷友右衛門のお袋が出してゐる市川の菜の花に着いてやつと安堵の思ひをしたといふ、伊光太郎は孫春太郎と共に龜澤町のガアドの鳥店にあつた爲め、被服廠へ避難し終に燒死した。

一〇九、女生徒の蒼い顔

七十名の死者を出した

女子職業學校小使の物語

神田一ツ橋女子職業學校寄宿舍は、一日の地震の際全部倒潰して在校中の舍監長小杉くら、舍監並木こう並に染色科講師山瀨もよ、同高橋きたよの四教員外生徒六十名無慘にも壓死した、其の當時の光景に就て生徒二名を率ゐて救助した小使は語る「私は舊校舍に居りましたが、あの强震で舊校舍が倒れかゝつたので狼狽して外へ飛び出した、其の時學校の方は授業は十一時で終り、殘りの教員が十

餘名殘つて居たばかりで生徒は一人も殘つて居なかつたので、學校の方は負傷者ありませんでしたが、道路に出て見ますと寄宿舍は大音響と共に見るかげもなくペチヤンコになつて居ましたので、まだ餘震が盛んに來ましたが私は自分の事など考へず、すぐ倒れた寄宿舍の屋根の上に昇り屋根をめくつて見ますと、中からかすかな聲で「助けて下さい」と云ふ悲鳴が聞えましたから、夢中になつて其の聲のする方をめくつて行きまして漸く一人手を引き助けだすと、又も其の下の方で聲がしましたからこれも引出し、三人目を引出さうと思つたが、其の生徒は半分土の中に埋まつてどうしても出ませんので、私はどうして足が出ないのかと申しますと、足が挾まれてどうしても離れませんと蒼い顏をして怨めしげに泣き叫びました、其の時既に倒れた寄宿舍の後方から火を發し、五寸位の穴から盛んに火を吹きだしたので氣の毒でしたが、どうすることも出來ません、夫れから火は益々猛烈になつてあの大きな寄宿舍も瞬く間に全部燒失してしまひました、寄宿舍が灰燼になつてから下を堀て見ますと、澤山の白骨の中にたつた一人外塀の處に少しも燒けて居ない生徒の死體を發見しました、そこで私は屍を生き殘つた舍監の方へ運んで來ますと、舍監は衣類や顏を見て「判つた」と一言申しましたので、涙ながら綠の髪を斷つて屍を柩に納めました、私は今になつても半分引出して助け得られなかつた生徒の蒼い顏が眼にチラツイて居て忘れる事が出來ません」と涙ながらに語つた。

一一〇、布團の上に子供が降る

大旋風に吹飛され危い生命を拾ふ

深川森下町の開業醫小關氏の患家で、本所外手町に肥料問屋を營む某氏が、小關氏に語つた話に、「火災が起ると同時に家財道具を逸早く取出し、船の上に積み、尙若い人の手があつたので一隻には布團を山のやうに積み込み、是から逃げやうとすると、その時猛火は江東一面を蔽ふてしまひ、被服廠邊りには大旋風が起り其の物凄さ到底話にもならぬ位、すると何處からとも無く布團の上に六つ程の子供が降つて來た、被服廠の大旋風に捲き上げられ運よく布團の上に落ち命拾ひをしたのである、可愛い子供で、何處の誰か解りませんが避難所で養つて居ます」と此の話と同じやうな事が幾つもあつた、之も外手町の酒屋の御用聞前日集金の殘りを集めやうと話をして居る中に地震となり、火事となり、夫れから無我夢中で横綱の河中にころげ落て氣がついた、外手町から横綱まで吹き飛ばされて來たのと知れた。

一一一、不動樣の利益で一家助かつた藤井

固くさう信じてゐる彼の妻が覺悟のひと聲

藤井六輔は大地震の時以來どうしてゐたかをお話しする、一日の朝、淺草で宮古路豐後掾の墓參をすませ、壹少し前に金田へ引上げてゐる時あの大地震が突發した、それっと伊井の命令で一同鴨居を差上げるやら柱を押へるやら、何分中には襯衣一枚になつてゐた者も多く、不意を喰つた事とて狼狽一方ならず、中にも藤井六輔はすぐ樣向島の伊井の家へ駈つけやうと飛出すのを伊井が呼び止め、それより自分の家が心配だから皆自分の家へ歸つておくれと早速の號令、それではと藤井は羽織も袴も一纏めに紙入などと一緒に引かつぎ宙を飛んで龜井町の自宅へ駈けつけると、石町からの火が次第に迫迫つてくる處へ、地震で三階の土藏が全部崩れ、觀音開きをしめる事も出來ず、女房やその母親はうろ〳〵する許り、そこへ近所の知人から暫く預かつてくれと七十幾つになるお婆さんを舁ぎ込む始末、藤井は弟子の藤木と倅とを勵まして箱車と急製の荷車に手當り次第荷物を積み、とりわけ大切なのは平常信仰する不動尊のお木像と、それを風呂敷に包んで背負出し、豫て用意し刺子袢纏に火事頭巾といふ形になつて大活躍、一旦明治座前から濱町の喜文の前へと逃たがどこも火に追はれて危險なので、中洲がよからうと行つて見るとこゝも火の海に包まれ人影も見えず、男橋の下に一艘の船が出やうとしてゐるを幸ひ、女房に母親及び右のお婆さんとだけを賴んで男達は陸を逃げやうとすると、女房悲鳴をふりしぼつて死ぬなら一緒に死にたいから一緒に船へのつてくれと叫ぶ、これも尤もと一同船へのつたが、この爲折角持出した荷物は全部捨てゝ終つた、何分兩岸の建物が燒けるので黑煙過を卷いて焰を吹つけ熱くつて迚もゐられず、何でも大川へ漕ぎ出せと焦つたが船頭は船の持主一人で藤井は舞臺でこそ「不如歸」の船頭などを屢々やつたが、本式に漕ぐのは初めてとて大困り、やゝもすれば船は潮の勢ひで火の中へ吹戻されさうになるのを、川へ入つては火の子をよけつゝ死物狂ひで大川へ出たものゝ、潮が早くて安全な所へは中々出られぬ、火の子は雨のやうにふつて最早駄目と覺悟をしたが、叶はぬ迄もと苦を水びたしにして女達へかけ、バケツで川の水を汲んではザア〳〵打かけると、水が船へ入り過ぎて沈みさうになつたので靑くなつて今度はかい出すやら、永代や大橋からの水死人が跡から跡から流れてくるのを、よけては川の水を呑むやら生きてゐる空はなかつたが、やうやく燒け落た向ふ河岸へ着き、その內に市中の火事も鎭まつて一先づと安心したのが三日目の朝、壹やら夜やら時間なんぞは一切知れず着のみ着の儘、燒跡で一旦別れた藤木や藤島などの弟子達に再會、藤島の案內で小石川の善光寺へ避難したが、家財は殘らず灰にしたものゝ、一同命に別條なかつたのは、火の中をこれだけは持出した不動樣の御利益と流石に威勢のいゝ藤井も男泣きに感泣

したといふ。

一一二、看護婦は白衣觀音

泉橋病院内に收容された孤兒と寄る邊なき人の群

陸軍其他の各救護班の手に救護されたる罹災負傷病者は實に十二萬三千五百二十八名の多きに達してゐるが、漸次衛生機關の整備と共に臨時病院や地方病院等に轉送して、極力その療養に努め就中最も多數の收容患者を擁してゐるのは泉橋慈善病院の二四一名と博覽會外國館跡に設置された上野臨時病院即ち東京市臨時救護所の九〇五名である、泉橋慈善病院は燃え狂ふ火の海に包圍されながらも和泉町と佐久間町の一廓、内務省衛生試驗所と共に不思議にも燒け殘つた病院である、云ひ盡せぬ蘇生の喜びは、やがて新しい希望となつて多數の醫員や看護婦を一層皷舞する處となり、震災當時より既に門前に臨時收容所を開設して、晝夜の別なく罹災負傷者の救護手當に盡して來たが、此の二十五日まで丶千四百五十五名の外來患者を取扱つてゐる、かうして一方に入院患者百二十名の定員を增加し、三百二十一名を收容してゐるが内八十名は退院し、現在は男が百二十八名、女が九十九名、小兒

が男兒四名、女兒九名である、本所深川方面の患者が一番多いと云ふ事でめる、燒野ヶ原に寂しく取殘されたはなれ部落のやうなこの病院を訪ねると不安の時も去つて病院らしいひつそりとした寂しみが外部の雜沓からかけはなれて、入院患者の氣分を一入に物思はしいものにしてゐる、一室に約五六十名見當に並べられてる白いベットには、蒼白な頰に極度のやつれを見せながら涙ぐんでゐる者、火傷に疼痛を覺えるのか、苦しさうに眉を顰めてゐる者、さうかと思ふと兩手や兩足を白い繃帶につゝみながら元氣よく將來を物語つてゐる青年もある、信仰の深さうな看護婦長綿谷禮利子女史はこれらの人々にいた〳〵しい眼を向けながら「一週間以前までは外科が多かつたが、今は内科が割合に多い樣です、それも重に腎臟災、脚氣などで氣候の不順や食物の不養生から來たものです、外科に屬する者もまだ澤山居ります、此人たちの中で殊に氣の毒なのは今度の災害で全く獨りボツチになつた方です、それらの中にはかなり老人が多い樣ですが、山崎さだ(五三)と云ふ火傷患者など親子で入つて居ましたが、親は七十六でとう〳〵亡くなりました、又引取人もなく老衰病で收容してる方もあります」と語つてゐたが、見れば六十七十と云ふ老人たちの多いのに一層同情を深くさせられる、殊に可憐なのは誰が手に救はれたか頭に火傷を受けて繃帶してゐる五歲位の可愛い女兒が二人、今は親もなく兄弟もなく全くの孤兒で、やさしい看護婦の手に抱かれて無邪氣なほゝえみを見せてゐた事である。

一一三、恐怖の山上に三日三夜

館山で苦しんだ野田九浦畫伯

今年の帝展改革で互選の結果に依つては審査委員の候補者に數へられて居た野田九浦氏は、十月末頃から胃腸病に罹り房州館山に家族と共に轉地して居た、すると九月一日俄の大地震で、房州方面は慘害も甚しく館山の如きは、全滅の悲運にあつてしまつた、九浦氏の居つた家は小高い丘の上にあつたが、續いて二度來た强震の爲め、家は一堪りもなく潰されてしまつた、九浦氏は家族を促して逸早く家から這ひ出したので辛うじて家の下敷にはならなかつたが、山の下を見ると或は崖が崩れ、或は海中に墜落し梁や棟に撲たれて慘死するもの數を知らぬ有樣、一家四人此の有樣に仰天し、怖しさに山から下りられもせず、其中下から避難して來る人も續々あるので、九浦氏等も止むなくその人々に從つて更に山の奥へと這ひ込んだ、所が餘震は更に止まない、人々皆戰々兢々として只管震動の止むのを待つばかり、食物は無し飲料水はなし、その苦しさは迚も筆や口に盡せない、斯うして山の中に三日三夜も過し、辛うじて山を下ることが出來たが、山麓の有樣は又一しほ悲慘なもので迚も一日だに安心して居られぬ、何とかして歸京する途はないかと種々考へた末、村の人の骨折で漸く一隻の艇船が借られたので之へ乘込み、靈岸島さして出發したが、扨て靈岸島へ着いて見ると一望たゞ焦土と化して居るので、夢見心地で漸く上根岸の家へ歸つたが、その怖ろしい三日三夜は生涯忘れることが出來ないと語つて居た。

一一四、潰家から女房の聲

織田觀潮氏が必死の働き

國觀門下の秀才織田觀潮氏は、此春から相州片瀬龍口寺の脇に畫室を作つて居た、震災の當日氏は令息を伴つて横濱へ用達に出かけると途中であの大騒動、直ぐに宙を飛んで我家へ引返すと、家は丸潰れとなつて附近の慘狀目も當られない、殘した細君はどうしたかと附近の人々に聞いて見たが、誰も見かけた人はない樣子、开で聲を限りに呼んで見た、すると中から聲がする、確に妻の聲だ、开で急いで屋根をめくり這ひ込まうとしたら、中に細君か居た、何故屋根でも破つて出なかつたかと聞いたら腰を打たれて身動きが出來ない、夫れでも一寸した柱が支へて生命だけはありました、と答へた、何處に人の運があるか判らない。

一一五、たゞ夢心地

覺えて居るのは芝公園だけ

カバン二つ抱へて命からゝ

九條武子夫人の談

地震のことはもう忘れやうとして居りますが、あの火事の恐ろしかつた事だけは尙ほ、まさ、まさと殘つて居ります、其日は院展の招待日で十一時半頃築地本願寺の住居に戻つて參りました、着更をして椅子により讀書をはじめやうと一二頁繰つた時、地震でせう、最初のはそれ程でもなかつたが其次のが隨分ひどい搖れ様でしたから、足袋跣の儘庭へ出ますと屋根瓦がバラ〳〵と落ちて來る、これは危いと更に裏の物干場まで行き其處の木につかまつて居りました、其内本堂前の廣場に澤山の人が避難して參りました、殊に近所の病院から若い看護婦達か何れも患者を脊負ひながら本堂の内まで運んで來る様を見ては本當に涙ぐましくなりました、諸方に火事が始まりましたが火の手はみんな彼方へ許り進んでるので安心して居たのです、四時頃になれば銀行に出てる主人が戻つて來ますから、一旦家の中に入り部屋を見るととても酷い有様でした、夕方六時頃になつて本願寺の方から危險が迫つて來る様子だから避難準備をなさいと注意があり、野宿の覺悟で重要な品物を取り纒めに又家に入りましたが、闇暗の手探りの上に餘震の度毎に肝を潰して飛び出す有様ですもの、辛うじてカバン二つを持ち出しただけです、モウ采女橋の側まで焰が迫つて來た、私共の顏が紅く火焰に照らされて熱う御座いました、何しろ逃げる場所がないで、兎に角家族や別院の人達五十名許り一團となり、築地の海軍大學の方へと遁げ出しましたが、モウ有栖川宮様の銅像あたりは人と荷物で埋まつて居ります、そして後から逃げ出して來る雪崩れの様な人波に揉まれながらお濱離宮の中まで全く命からゝ遁げました、其處で高樹町の兄(大谷光明師)に不思議に會ひました、そして靑山方面は安全だと云ふ事を始めて聞いたのです、火の粉は私共の身邊に流星の如く墜つて參ります、兄の乘つて來た俥には私共の父の代から仕へてる婆やを乘せ、其夜のうちに兄の家まで遁れました、恐ろしい火の海を何う切り拔けて來たか其時は全く夢心地でしたからよく判りません、芝公園の中を拔けた事だけは覺えて居りますが……。

一一六、救つた生命五萬

一身を犧牲にした水上の殊勳者

今度の大災害で陸上と相俟つて水上警察署の活動は實にめざましいものであつた、陸上と違ひ水の上に於ける仕事だけに非常な困難と危險とを伴つたが、署長以下百四十名の署員と百名の水夫は死を賭して奮闘し、幾萬の人命を救つた、警視廳では其功績を認め、救助の場所と人員の正確なものを調て出せと云ふので、目下同署で調査して居るが、其數五萬を超えて居ると云つて居る、羊羹色の制服を一着身につけた儘燒け出された寺坂署長は、署の燒跡で當時の模樣を語る「地震と共に即時非常配置をして八重洲快心の兩汽艇を始め、千早外五艘のモーターを各川筋の救護に出し、同時に隅田川汽船の小蒸氣隅田丸を徴發して、極力救護に努めたのであるが、兎に角フイゴの口から吐き出す樣な火の勢ひで火足が速い爲、陸上も容易に逃られなかつたものと見え、川筋は大小を問はず避難の人々か乘り込んだ荷足や、傳馬船が數知れず摩胡ついて居た、それも船頭が乘つて居ればよいが、手當り次第苦しまぎれに飛び乘つたのであるから、火の迫るにつれ、只悲鳴を揚げて居るのみで船を動かすものもない、そうかと思へば家棟かドン〳〵燃えて居る、倉庫の下に船を繫いだ儘安全のつもりで居るものもあり、實に危險極まるもの許り、各方面に出動した署の船は、之等の船を手當り次第に引張つては安全地帶に運んだのだが、避難民の乘つて居る船は何れも河岸に繫いである爲、淺くて汽艇が近つけぬ、止むを得ず綱を投げ、或は署員が川の中へ這入つて先の船に結びつけ引いて逃げたのだが、署員は悉く最後迄踏み止まり、火の中でよく救助に努めた二百四十六名の署員の内、勤務中自分等始め百四十一名の家が燒けてしまつたが、枕橋派出所詰めの藤澤巡査は最後に船で避難せんとした際、逃げ殘つた人々が一度に多數乘り込んだ爲沈沒して行方不明となり、又油堀派出所に居た近藤外三名の巡査は同樣救助中逃げ損じ、十三時間油堀に這入つて居て、火が靜まるや陸に上り、引續いて飲まず喰はず救助に働いて居た爲、近藤巡査は卒倒して警視廳の救護自動車に救はれ手當の上、漸く蘇生し、徴發した隅田丸三四號の船長と、船員一名は猛火の中を實によく働いた、姓名は目下調べて居るが、何れ總監に上申するつもりだ。

一一七、流れ來る死體を抱きさめて

物凄き其夜の實話

幼子二人を兩手に抱へ、晝夜隅田川にひたり九死に一生を得た人の實話「被服廠一帶が火の海と化したので潮の如き老幼男女の罹災者が悲鳴をあげながら、小梅町の向島堤へも押寄せて來ました、その數およそ一萬、夜に入つて益々加はり、大風呂敷や、鍋、釜を抱へた人々で、八百松裏から言問の渡しにいたる一帶の堤は蟻の這ひでる隙もないといふ有樣、折しも三圍神社の裏手に猛烈な火の手が

あがり、忽ちにして土手下一面に燃え擴がり、熱風さへ加はつて、その熱苦しさはたとへやうもなく火の移つた荷物は河中に投じて事なきも着衣に燃え移つた、飛火はどうすることもできず、しかも進路は一面の火に隔てられ、今は進退谷つて、萬餘の人々は踏み潰され溺死する者數知れず、忽ちにして屍の山を築くといふ有樣でした、しかも熱風は益々苦しいので、川の奥へ〳〵と進み出で、干潮の早い流れに押流されて死んだ人が過半數にも上つたでせう、遂には妻や長女をも見失ひ、夜の明くるをまつて、せめて死體なりとも見出さうと、鯨波の聲をあげつゝ隅田川へと雪崩れ込んだのです、私はその時、長女を妻の手に渡し、二兒を抱へて離れぬやうに手を取合ひ、流れにはひつたのですが何樣萬餘の人々が一時に雪崩れ込んだため、押合ひへし合ふさま物凄くも恐ろしく、女子供は足許を流るゝ屍體を抱き止めては檢めたのですが、とうとう見出すことがてきませんでした、それらの屍體のうちには人工呼吸を施せば蘇がへつたと思ふやうなのが澤山ありましたが、如何とすることができませんでした。

一一八、親一人子一人

新日比谷村に涙を誘ふ情景

涙なしでは見られない樣なバラック建の日比谷村でも、燒け出された人々には、どれだけそれが溫かいねぐらであるか「お家が出來てうれしいなア」幾日かを雨に風になやまされた、吹けば飛ぶやうな小さな掘立小屋から居を新にする事の出來た罹災民の小さな兒童たちは、却て賑やかな隣近所に明るい悅びを見出してゐる、かうした中に日比谷村の片端れ、薄い繩莚に齒磨や、淺草紙、燐寸など僅ばかりの露店を開いてゐる一人の男の傍らに娘らしい十歲位の女の兒が人形を一つ大事さうに抱えて遊んでゐる、「あたしね父ちやん、人形が燒けないで本當に嬉しいわ」と人形の一枚の着物を着せたり、脫がせたり、それを父親はいぢらしさうに涙ぐむだ眼で見てゐる、この人勝島某と云つて深川の某靴店に勤めてゐた人、主家のため殆ど自家を犧牲にしたやうなもので、只一つ人形を入れたバスケットを子供のために持ち出してやつたきり、何一つ取出したものはなく、妻はとう〳〵燒死して、親一人子一人漸くのがれたものであるといふ、娘は元子と云つて小學校五年生「父ちやん、學校の本を燒いて了つて、あたしかなしいわ」學校の好きな元子はかう云つて燒け失せた本を惜みながら、人形に寂しい心をなぐさめてゐる。

一一九、四谷署長の美談

危き朝鮮人を助けた
道路掃除に働らく十七名

後藤内相が一部不良鮮人のあつたことを明言したせいもあらうが、鮮人に關する流言蜚語は未だ却々消えない、その一部鮮人がナニをやつたかといふと、放火及び井戸へ毒物の投入だといふので、市内の各警察署から管内に向つて「井戸に氣を付けろ」とふれ廻つたほどだつたところが人心次第に安定すると、放火には未だ疑問があるが、井戸の毒物投入といふことは、嘘八百狂人に次いで不狂人が走つたのだと分かつた、その流言の火元は上野警察署管内の井戸で、警視廳衛生課で嚴重調査した結果少しも毒は無なつた、それはさて置き、鮮人の保護に就いて一番成績のよかつたのは四谷警察であつたらしい、四谷永住町旭町には百人許りの鮮人がゐる、四谷署では始め鮮人不穩の流言に泡を喰つて直に警戒したが、噂ほどではなく、その内民衆が鮮人を見付たら殺して了へなどと殺氣立ち、そこゝでなぐり合さへ始まつたので、直ぐ五十餘名を保護し、庭園を彼等の住居に宛て、焚き出しをやり罐詰などを喰はせた、そして行動をよく調べたところ一人として不良性を帶びた者はない、一方鮮人の總てを習志野に送るといふ話しがあつたので、戒嚴令で四谷駐屯の第六十六聯隊長に收容方を依頼すると隊長は「習志野は俘虜收容所だ、鮮人を容れるところではない」とキツパリ撥ね付けた、酒井署長はなる程と感じ入つた末、直に大部分を釋放すると同時に家のない鮮人十七名を佐藤區長に頼んで路道の後始末、人夫に使つて貰ひ、彼等は食事付一日二圓也で汗水流して喜んで働いてゐる、鮮人の流言蜚語盛んに起つた今日、なんと云ふ美しい物語りであらう。

一二〇、大震災の琵琶歌
竪川で命拾ひした

中西牛郎氏作

竪川は被服廠に次ぐ慘死者の多い所であるが、此所に一命を拾つた人の中に往年文學界に名を馳せた中西牛郎氏が居る、氏は其體驗した所を琵琶歌に作つた即ち本篇である、氏は本所二葉町の寓居にあつてこの災害に見舞はれたのである。

夫れ眞人は火に燒けず
水に溺れぬものとかや
されど水擊三千里

扶搖を摶つて九天に
上る翼をもたぬ身は
いかに劫禍をのがれむや
頃は大正十二年
九月一日の正午とて
本所二葉町の詫住居
晝餐果てし時しもあれ
天柱碎け地軸折れ
盤石崩るゝ大地震
紅焔處々に燃え上がり
黑煙濛々大火災
アット言ふ間もあらばこそ
着のみ着のまゝ遁れ出で
老若男女押合ふて

右往左往に駈廻る
いまや市街は大焦熱
焦熱地獄無間阿鼻の
焔の底の罪人も
是には過ぎじと思はるゝ
煙は中天に滿々て
焔は虛空に隙もなし
流石東洋第一の
大都會なる東京も
瞬く間に大かたは
煙となるこそ悲けれ
あな心憂や諸人は
四方八面猛火にて
燃え立つ火炎に押懸られ

頭蹴破られ腰踏まれ
死ぬるは其儘乗り越えて
數萬の群衆我先に
我先にとぞ逃げにける
何時しか友を見失ひ
妻にもはぐれ我ひとり
死魔の手よりや逃れんと
南をさして馳せ出し
流れはひろき竪川の
岸に來れど背水の
陣も張られずこゝもまた
押し合ひ揉合ひ群集の
舟を爭ふありさまは
さながら敵に追はれたる

敗軍兵に異らず
風火を煽れば川を越す
火はまだ風を驅り起し
橋も小舟も皆燒けて
水にも防ぐ力なし
あゝ竪川よ竪川よ
竪川は我死場所か
竪川は我が生き場所か
運をば天に打ち任せ
川にさんぶと飛こみて
力限り泳ぎしも
浮べば火の子に髪を燒き
沈めば波にぞ流さるゝ
溺れし死體の流れきて

足に纏はる怖ろしさ
猶水中に立ちながら
大空高く見上ぐれば
雲間の月の影すごし
あはれ地球の命運を
弔ふ如き大自然
その威力こそ限無や
之にくらべて見るときは
如何に果敢なき人類ぞ
されば富貴も功名も
榮華も夢か燒跡の
煙と共に消はてぬ
生死の間際に殘れるは
唯全宇宙を意識せる

我のみぞかし我こそは
永久不滅のものにして
萬有の成壞肉體の生死
それに超越し得るといふ
信念起りて恐怖の念
消失せしこそ不思議なれ
此の安心立命に基調して
身を堅川の水清く
殘る我世を終りなば
また何事か成らざらん
實に眞人は火に燒けず
水に溺れぬ眞理をば
體驗せしこそ貴けれ
體驗せしこそ貴けれ（終）

第四　大震災の生んだ此の數字

死者行方不明者十二萬餘

罹災者總數二百三十八萬

大震災による被害はもとより正確な調査の出來る筈がないが、九月廿六日迄に救護局に集まつた大體の統計によると死體の發見されたもの、燒死・壓死合計七萬七千八百三十一人、行方不明四萬二千五百四十五人となり、罹災者の概數二百三十八萬五千五百人に達してゐる、地震による全潰戸數は、五萬九千八百四十三、半潰六萬九千二百二十三で、燒失は三十五萬百六十八戸、重輕傷者で救護手當を受けたもの十萬三千百人といふ數字になつてゐる、以上の行方不明の内にも死者が餘程あるものと想像され、海に流れたりして、永久に死體の發見されないものもあらうし、燒けた數や潰れた數も正確な報告のみでないから、凡てに亘りこの數字より餘程多いものと見るのが至當であるといふ。

總損害百億

正確の數は到底算出の道がない

大地震大火災による總損害額は各方面で調査もし、統計も取らうとしてゐるが、個人の動産で燒けた者は到底價格の見積りやうもなく、土地が無くなつたり、宅地が崖になつたりしたものも一定の價格を算出する方法がなく、燒けた骨董類の二千萬圓などゝいふのも相場のあつて無いやうなものだ、永久に正確な損害額の算出される時は絶對にないが、國家及公共團體所有の損害は約十億と見られ、民間のものを加ふれば約百億位だらうといはれてゐる、それも復舊費や、燒けても使へる財産やを勘定することになつたら到底算出する事は出來まいといはれて居る。

數字に現れた被害の實狀

内務省調査

大震災の被害區域は、東京市と市隣接の荏原、豐多摩、北豐島、南足立、南葛飾の五郡、埼玉縣の一部、千葉縣、神奈川縣、靜岡縣の賀茂、田方、駿東、富士四郡、山梨縣の一部等、一府五縣に亘つてゐるが、其被害を各都市地方別にすれば左の如くである。

○東京市

被害世帶數三十八萬餘、罹災人口百六十萬四千、當日の人口二百二十六萬五千餘に對し、七割餘に

當り、全潰一萬三千六百餘、半潰三萬餘、燒失二十七萬五千餘、破損六萬一千餘、死者六萬五千餘、傷者三萬餘、行方不明三萬四千五百餘で、死者は百人に對して二人九分傷者一人四分、行方不明一人五分となり、當日二百二十六萬五千あつた人口が九月廿日には百四十萬二千人に減つた。

○市隣接五郡

全潰一萬四千五百餘、半潰二萬一千九百餘、燒失一萬一千八百餘、罹災人口廿一萬五千七百餘、死者千六百九十一、傷者二千四百七十五、行方不明四千四百七十六、其他の罹災者約廿萬七千人。

○横濱市

罹災人口三十四萬八千餘で、當日人口の七割八分に當る、全燒五萬八千九百、半燒六十八、全潰一萬一千六百餘、半潰七千九百餘、流失六百五十戸、死者二萬三千四百、傷者四萬二千餘、行方不明三千百餘、其他二十八萬餘、死者は現人口の五パーセント、傷者は九パーセント四分。

○横須賀市

全潰二千七百、半潰二千、罹災民二萬九千八百(全人口の二割五分)死者五百廿、傷者九百七十二、不明百廿五、其他二萬四千餘。

○神奈川縣下十一郡

罹災者四十九萬四千、死者五千四百、傷者二萬三千三百、不明二百五十、死者は橘樹郡足柄下郡最も多く、傷者は三浦橘樹最も多し。

○千葉縣

罹災者十一萬七千餘、全潰一萬五千、半潰七千三百、流失四十八、燒失五百、死者千三百餘、傷者二千七百餘、不明十三。

○埼玉縣

罹災七萬五千人(現人口の五分)死者二百十七、負傷五百十七。

○靜岡縣四郡

全半潰千八百餘、燒失三千九百餘、流失四百八十、浸水三百餘、死者二百八十三、傷者千六十九、不明八十一。

○山梨縣

全潰六百四十三、半潰廿四、死者廿、傷者七十三、生活困難七千餘。

九十萬人が郡部へ避難してる

市部罹災者で現在郡部に避難せるもの九十萬七千餘人に達してゐる。

負傷者總數十四萬三千餘

警視廳救護班及診療所で取扱つた負傷者數は十四萬三千餘名に達してゐる。

救護費すでに三千萬圓

今までに使つた額

戒嚴令が布かれると同時に軍艦、汽車、汽船、自動車、馬車、手車等によつて、百餘萬石の米と野菜其他の食料品から、驚くべき多量な救護品が輸送され、諸外國から贈られた金品や、輸送費も隨分なものだが、國内で米其他の徵發買上輸送其他に用ひられた、國家の救護費は二度に二千六百萬圓を支出し、義捐金の内からは五百五十萬圓を支出することゝなつて、全額の大部分は既に費消され、軍隊の集めたガソリン代だけでも十數萬圓に達してゐる。

戒嚴兵力と費用

兵力—五萬、費用—二百萬圓

九月八日迄に戒嚴司令官隷下に入つた總兵力は歩兵二十一個聯隊、騎兵六個聯隊、工兵十八個大隊、鐵道、電信各二個聯隊で總員三萬五千に及んだが、更に十日前後に至り戒嚴令下の兵力は、六個師團五萬に及び、警備配給全く完成した、そしてこれに要したる戒嚴費用は二十五日迄に大約二百十餘萬圓にのぼり、その内譯は左の通りである。

軍隊招致費	四十五萬圓
人馬の糧秣	百二十萬圓
ガソリン	十萬圓
軍需品の運搬	十六萬圓
傷病者に係る費用	二十三萬圓

大正十二年十月十七日印刷
大正十二年十月廿日發行

遭難哀話
定價金一圓廿錢

編者　古瀨傳藏
發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地　宮下軍平
印刷者　東京市牛込區西五軒町五十二番地　福山福太郎
印刷所　東京市牛込區西五軒町五十二番地　行政學會印刷所第二工場

不許復製

發行所　東京市神田錦町一ノ十六
振替東京第三四〇九番
二松堂書店
電話神田二四七八番

東京大震大火記念出版

東京大震大火寫眞帳

四六判アート紙印刷鮮明
特價金一圓　書留送料十三錢

讀賣新聞記者　古瀨傳藏氏編

通俗東京大地震講話

附今後の建築

四六判洋裝美本
定價金七十五錢　送料金十二錢

讀賣新聞記者　古瀨傳藏氏編

悲凄慘絶大震大火遭難哀話

四六判洋裝頒美本
定價金一圓二十錢送料十三錢

發行所　東京神田錦町一ノ十六　二松堂

526
14

新刊

通俗
東京大地震講話
附今後の建築

四六判洋裝美本
定價金七十五錢
書留送料十一錢

126
14

終